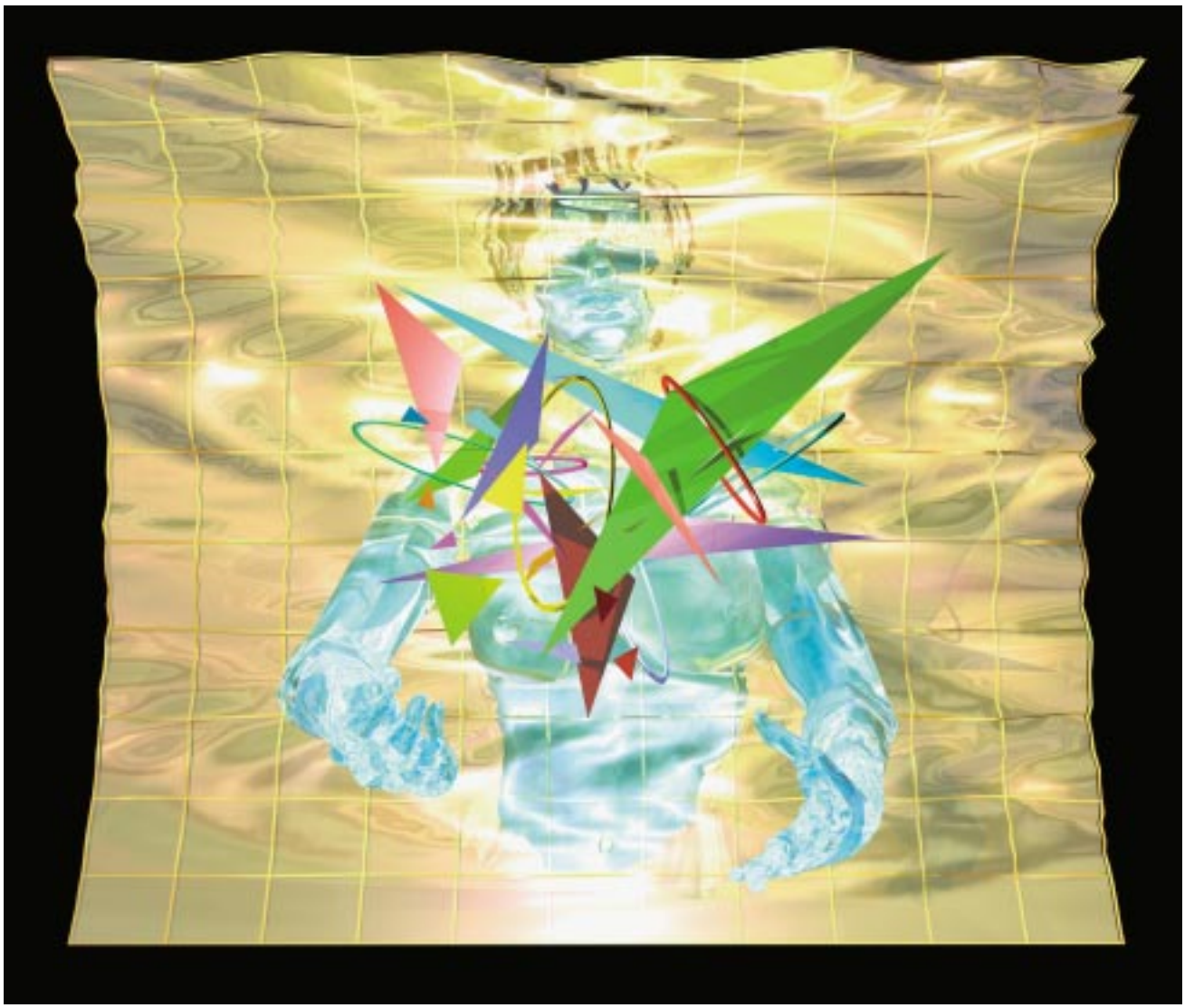
# 石川県立美術館だより

平成14年7月1日発行　第225号



手の知から（3）　西田洋一郎　平成13年（2ページ本文参照）

## 目　次


プリズムのきらめきから　西田洋一郎 絵画空間 …2
花鳥画の世界、古九谷・再興九谷 ……3
常設展示室　主な展示作品 ……4
美術館小史・余話（24）、図書閲覧室NOW …5
月例映画会楽屋裏 ……5
企画展示室、各地の展覧会、美術館の本 …6
企画展TOPIC、七月の行事案内他 ……7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信他…8


ホームページアドレス　http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

## 常設展示室(第4展示室)

### 特別陳列
プリズムのきらめきから

# 西田洋一郎　絵画空間

**6月20日(木)～7月22日(月)**

西田洋一郎氏

本展は小松市出身で、シェル美術賞展、ジャパンエンバ美術コンクールなどで受賞を重ねた後、ドイツに留学し、現在はフランスで活動を続ける西田洋一郎氏の、初期作品からコンピュータを用いた最近作まで、五十点により、その多彩な絵画世界をご覧いただくものです。

西田氏は、クリスタルな球体、立方体、三角柱などが相互に映し合う無限連鎖の映像と、光の照射により生ずる虹の七色と影、この三者を緻密に描いて清冽な絵画空間を生み出しました。その後ドイツに留学し、西欧と対峙する自己を見つめるなかで、画面には不定形な帯状の形が加わり、空間は歪み、不条理の世界を垣間見せるようになっていきます。

そして変容はイメージのみに止まらず、それを具体化し、定着させるものとして、コンピュータが深く関わり始めます。

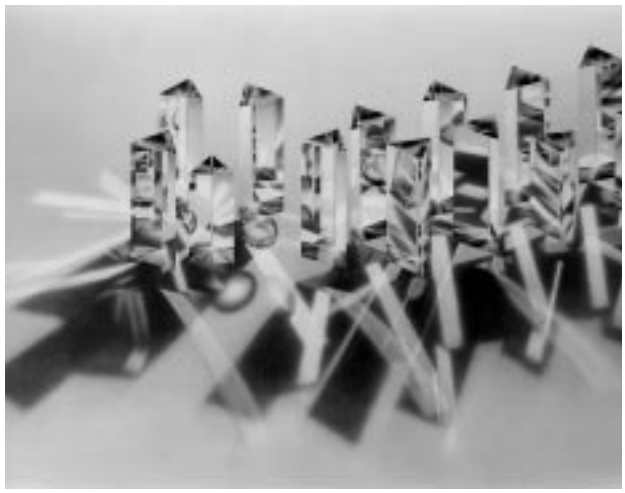
〝自然の持つ法則と知性をコンピュータで絵画にする〟これが、西田氏の現在の制作理念ですが、その言葉通り、近作では風景や人体など有機形態を一旦数値に還元し、コンピュータ処理により、きらめく光の中に再構築するという独自の手法をうかがわせています。無機的な数値が有機的な形と色を生み出していくさまは、分子の連なりがこの世の事象を形成する、その相似形ともみなせます。

アクリルや水彩などの従来の絵画作品と共に、動画も含めたコンピュータグラフィックスによる作品をご覧いただき、絵画の新しい可能性に思いを馳せていただければ幸いです。

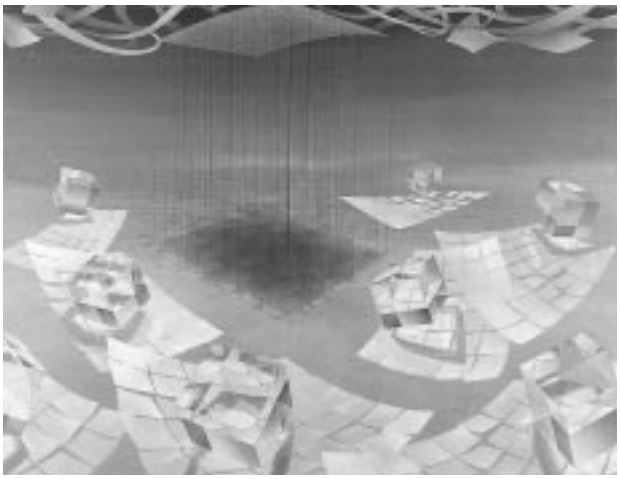
なお期間中には講演会（7、8ページ参照）も開催されます。

### 略　　歴

| | |
|---|---|
| 1948 | 4月14日、石川県小松市串町に生まれる |
| 1976 | 第20回シェル美術賞展佳作、'77年3等、'79年佳作 |
| 1980 | 個展（東京セントラル画廊） |
| | 第24回シェル美術賞展1等賞 |
| 1982 | ジャパンエンバ美術コンクール（京都国立近代美術館）、渡独 |
| 1983 | カッセル芸術大学入学 |
| 1984 | 個展（カッセル）、以後毎年各地で開催 |
| 1988 | カッセルBBK記念展出品、カッセル芸術大学修了 |
| 1989 | インド、ネパールを放浪 |
| 1993 | ブラジル、アルゼンチンで制作 |
| 1996 | 個展「絵画の空間」（ギャラリー・ルフレ、小松） |
| 1997 | 第26回現代日本美術展（下関市立美術館賞） |
| 1998 | フランスに移る |
| 2000 | 個展（大阪府立現代美術センター） |
| 2001 | 個展（アートシアターいしかわ） |



プリズム分光画(1)　昭和57年



線の領域への風景　平成4年

舟　どこからかどこへ…　平成14年

## 常設展示室(前田育徳会展示室)

### 特　集

# 花鳥画の世界

**6月20日(木)～7月22日(月)**

「花鳥画」では、「花」と「鳥」だけでなく、広く「花木」・「草木」・「動物」・「虫魚」・「蔬菜(そさい)」など、あらゆる動植物が対象となります。本特集では、前田育徳会所蔵作品の中から、こうした「花鳥」を題材とした絵画・工芸品を紹介します。ここでは、その中から三点について、簡単にご紹介しましょう。

江戸時代になると、人々はそれらに博物学的関心を抱くようになり、「科学」と「芸術」が非常に接近した「花鳥画」が生まれます。特に諸大名は、鷹狩を通して多くの鳥類に関する情報を集めていました。領内には鷹場が設けられ、鷹匠が置かれました。鷹匠は鷹狩の際、鷹によって猟を行なう役職ですが、日頃より鷹の養育・調教を行なうことも重要な任務でした。加賀藩御用絵師・六代梅田九栄（一八〇〇年没）によって描かれた『鷹狩図絵巻（夏の景）』（一巻）には、鷹狩に備えて狩場で鷹に鶴や白鳥を捕らえさせ、調教具合を確かめる鷹匠たちの姿が生き生きと描かれています。『鳥画帖』（一帖）は鳥類を写生したものですが、こうして得られた鳥類に対する科学的情報が、丁寧に記録されていたことがわかります。

四幅から成る『四季花鳥図』は、明治時代に活躍した村瀬玉田・野村文擧・瀧和亭・川端玉章の四人の日本画家により、春・夏・秋・冬の光景が描かれた合作です。玉田は春の麦畑と雲雀(ひばり)を、文擧は夏の雲間に飛ぶホトトギスを、和亭は秋の野に降りた鶉(うずら)を、玉章は冬の海上を渡る千鳥をそれぞれ描きました。四人は前田家に招かれ、画題を与えられこれを描いたのでしょうか。

本特集ではこの他、山本梅逸筆『林和靖・花鳥図』（三幅）、王若水筆『花鳥図』（三幅）、徳川家綱筆『樹上小鳥図』（一幅）・『翡翠図』（一幅）、徳川家慶筆『日の出に烏図』（一幅）、『女三十六歌仙色紙雉図』（一双）、『漆絵草花禽虫図絵替角香盆』（二枚）、『漆絵螺鈿草花文食籠』（一合）、『箔絵花鳥文壺』（一口）を加えた、合計十二点を紹介します。

---

五月十九日、ＮＨＫの新日曜美術館で、**「青い桜・謎の磁器・古九谷の美」**が放送され、その直後より古九谷の展示についての問い合わせが、連日続いています。**《青い桜＝青手桜花散文平鉢　古九谷》**は、四月の石川県九谷焼美術館開館記念展の主要作品として貸し出ししていましたが、このほどようやく返って来ましたので、この特集展示よりご覧いただけます。

さて**古九谷**は、明暦元年頃から宝永七年頃（一六五五頃～一七一〇頃）加賀温泉郷で有名な山中温泉から大聖寺川を十三キロあまり上流にさかのぼった九谷の地で焼成された色絵磁器をいいますが、古九谷窯廃絶後は、加賀地方では製陶が行われず、窯業再興の先鞭をつけた一つが、文化四年開窯した金沢の**春日山窯**です。この窯は文政初年頃に廃窯になり、それを惜しんで加賀藩士武田秀平（号民山）によって、文政五年に開かれ、赤絵細描を特色とするのが**民山窯**です。いずれも金沢地区での開窯です。

能美・小松地区で先鞭をつけたのが文政二年開窯の**若杉窯**です。藩の保護奨励もあって興隆し、いわゆる殖産興業の量産方式による日用雑器が中心に焼かれます。また文政二年には本多貞吉に陶法を学んだ藪六右衛門開窯の**小野窯**、弘化四年小松の松屋菊三郎が主宰した**蓮代寺窯**、幕末から明治初年にかけて、華麗な彩色金襴手の技法で一世を風靡した**九谷庄三**などが活躍しています。

他方、江沼地区で雄勁(ゆうけい)な筆致、渋くて深く、しかも厚く彩られた豪放華麗な古九谷の再興をめざして、文政七年に開窯したのが**吉田屋窯**です。このほか、赤絵細描を特色とする、天保三年開窯の**宮本屋窯**、吉田屋窯の塗埋様式を踏襲する**松山窯**、金襴手で有名な**永楽和全**など、今日の江沼九谷の流れが形成されます。

九谷焼美術館の開館とＮＨＫの放送を契機に、今日の九谷焼の源流となっている、これらの諸窯の特色と変遷をご鑑賞下さい。

## 常設展示室(第2展示室)

### 特　集

# 古九谷・再興九谷

**前期　6月20日(木)～7月22日(月)**
**後期　7月26日(金)～9月10日(火)**

県文　青手樹木図平鉢

## 常設展示室

# 主な展示作品

**6月20日(木)～7月22日(月)**

◉＝国宝　◎＝重要文化財　○＝重要美術品
□＝石川県指定文化財

□色絵鳳凰図平鉢　古九谷

青空と水門　新保甚平

### 前田育徳会展示室

**特集　花鳥画の世界**

鷹狩図絵巻（夏の景）　六代梅田九栄
鳥画帖
四季花鳥図　村瀬玉田・野村文擧・瀧和亭・川端玉章
林和靖・花鳥図　山本梅逸
花鳥図　王若水
樹上小鳥図　徳川家綱
日の出に烏図　徳川家慶
女三十六歌仙色紙雉図

### 第1展示室

◉色絵雉香炉　野々村仁清
◎色絵雌雉香炉　野々村仁清

### 第2展示室（古美術）

**特集　古九谷・再興九谷　前期**

**古九谷**

○□色絵布袋図平鉢
□色絵鳳凰図平鉢
□青手樹木図平鉢
青手桜花散文平鉢
青手老松図平鉢

**再興九谷**

色絵万年青図平鉢　吉田屋窯
色絵竜虎図平鉢　宮本屋窯
色絵芦翡翠図平鉢　松山窯
色絵唐獅子牡丹図平鉢　若杉窯
色絵自動噴水器　粟生屋源右衛門

### 第3・6展示室（近現代美術）

**油彩画**

1982年　私　鴨居　玲
もうひとつの風景―7　酒井幸雄
裸女達に捧ぐ　宮本三郎
空の肖像　森本仁平
雲岡石窟　山口操助
交霊術・HARP　吉田冨士夫
青空と水門　新保甚平
アラブの旅　高光一也

**日本画**

山里　石川　義
夏日　稲元　実
船と人　坂根克介
午後　中出信昭
生生　仁志出龍司
花車　羽根万象
室蘭　平桜和正
残照　曲子光男

**彫塑・造形**

古代への想い　石田康夫
縛　坂　坦道
華ごろも　田中　昭

### 第4展示室（近現代美術）

**特集　プリズムのきらめきから**
**西田洋一郎　絵画空間**

※2ページをご覧下さい。

### 第5展示室（近現代美術）

**陶芸**

彩釉鉢　三代徳田八十吉
釉裏金彩泰山木文飾鉢　吉田美統

**漆工**

蒔絵箱「鳴き渡る」　寺井直次
漆の花生　松田権六

**染色**

友禅訪問着「魚のむれ」　木村雨山
友禅白地紫陽花文訪問着「清裳」　羽田登喜男

**金工**

砂張銅鑼　魚住為楽
砂張稜線磨地水指　魚住安彦

**木竹・その他の工芸**

黒柿造食籠　川北良造
桑造金銀縮れ線象嵌飾棚　氷見晃堂
截金彩色合子「花守犬」　西出大三

◆**観覧料**

| | | |
|---|---|---|
| 個人 | 一般 | 350円 |
| | 大学生 | 280円 |
| | 高校生以下は | 無料 |
| 団体（20名以上） | 一般 | 280円 |
| | 大学生 | 220円 |
| | 高校生以下は | 無料 |

生生　仁志出龍司

砂張稜線磨地水指　魚住安彦

縛　坂　坦道

# 美術館小史・余話 24

嶋崎　丞（すすむ）　当館館長

## 旧館開館十周年の歳を迎えて（二）

昭和四十四年三月、年度でいえば昭和四十三年度であったが、理屈をつけて十周年記念展として開催した「ロートレック展」は、先号で述べたように大変な盛況のうちに終了した。しかし厳密にいえば四月以降の昭和四十四年度が十周年に当たるので、館独自の企画記念展を開催する必要があった。

そもそも日本古美術の名品を展示紹介することを目的として開館したこともあって、「開館記念展は日本の古美術で行こう」ということになった。しかし古美術の名品を単に集めての展示では能が無さ過ぎる。やはり十周年を豪華に飾る内容と名称が必要であった。そこで私の提案で「琳派の芸術」としてはどうかと話したところ、先輩のN氏から大変なお叱りを受けた。周知のとおり、今日でも琳派の作品を一堂に集めて展観を開催するということは至難の技である。それが開催することが出来れば、学芸員の実績として高く評価されるほどであった。当時としては、このような企画を、開館してわずか十年しか経っていない地方の公立美術館が、考えること自体が無謀に近かったのである。ただ、まだその頃は現在のように美術館が、どこの地域にでも存在するという状態ではなかった。例えば秋の展観予定ならば、その年の春から準備にかかるという、比較的ゆったりと行動を起こしても、他の美術館と競合することがない時代だったのは幸いだった。しかしそれにしても期日が迫っていたので、N氏と私との出品交渉の行脚がすぐに始まった。互いの努力の甲斐もあってか、宗達の風神雷神の図屏風を始めとして、光悦・宗達・光琳・乾山・抱一・芦舟・始興などといった著名な名品を、見事に集めることが出来たのである。今同じ事をやれといわれても、大変な努力が必要かと思われる。

**「開館10周年記念展　琳派の芸術**
**光悦・宗達・光琳・乾山名作展」図録（絶版）**
**会期 昭和44年10月4日～26日**

# 図書閲覧室NOW

## 新着図書紹介

一年間の動向を、さまざまなデータのもとに解説した図書を「年鑑」と呼びますが、そのうち日本美術に関するもので、東京文化財研究所美術部の編集によるものが、今回取り上げる『**日本美術年鑑　平成十二年版**（平成十四年刊）』です。

これは、毎年刊行されているもので、情報は二年ほどのタイムラグがありますが（本書は平成十一年一月～十二月のデータが対象となっている）、データは正確に記述されています。内容は、まず年史として、主な出来事が月別に簡潔にまとめられています。そのあと、開催された展覧会の情報（タイトル・会期・会場・紹介された文献）が企画展・作家展・団体展に分けて記載されています。そして次に、充実した美術文献目録が続きます。これは雑誌・紀要・新聞など、主な定期刊行物に掲載された美術関係の論文や記事を、内容によって分類整理し、それぞれタイトル・著者・掲載誌をピックアップした目録で、かなりくわしく調べられています。さらに特徴的なのは、美術展覧会の図録に関する文献目録でしょう。その年に開催された展覧会を、企画展と作家展に分け、そこに記載されている論文のタイトルと著者を一覧にしたもので、他にあまり類をみないものです。最後に、物故者の詳細な略歴が掲載されており、本書は、その年のわが国の美術界の主要な動向を、把握することができる有効なツールといえましょう。

※開室時間は午前九時三十分～午後四時三十分。貸出し、コピーサービスは行っておりません。

# ホール

## 月例映画会楽屋裏

これまで当館では、毎月ホール（二〇九席）で、月例映画会を行ってきました。日曜日の午後、月に二、三回それぞれ一、二本の割合で上映し、近年は一年間に約三十回上映会を開催してきたことになります。上映するフィルムは、すべて十六ミリで、当館の所蔵になるものです。現在、約一五〇タイトルのフィルムがあり、内容は、絵画・彫塑・工芸・建築・芸能・歴史などさまざまですが、とりわけ伝統工芸に関するものが約半数を占めており、当館の映画フィルムコレクションの特徴といえましょう。フィルムは時間が経つと、色味が変化してきたり、内容的にも不都合な箇所がでてきたりするものですが、特に、伝統工芸の技術記録映画は、時代とともに忘れ去られていく名匠たちの技の粋を、我々の視覚に間近に開示してみせてくれる点で、非常に貴重な資料といえましょう。

上映するフィルムの選択は、その時の開催中の展覧会の内容に関係あるものを中心にリストアップしているのですが、必ずしもそれに該当するものがあるわけではないので、何を映すか頭を悩ませるところです。とにかく、フィルムの使用頻度が、あまり偏らないように企画しています。また、月例映画会のほか、毎年、県内の市町村で開催される移動美術展にも、所蔵フィルムを活用しています。美術作品の展示だけでなく、美術映画を上映することで、地元の人々の作品鑑賞の手引きにしていただいたり、広く芸術に親しんでいただこうと、会期中、毎日上映会を行ってきたわけです。

# 企画展示室

## 第55回二紀展金沢展

**七月七日(日)～十五日(月)**
**(第7・8・9展示室)**

二紀会は、『類型化を排する。具象・非具象を論じない。創造的な個性の発現を尊重する。情実を排し新人を抜擢し、積極的に世に送る。』の主張を掲げて昭和二十二年以来五十五年間活動を続けています。金沢展は、東京・本展出品作品約一千点の中から厳選された、大家から新鋭まで絵画・彫刻あわせて八十二点を基本に、地元出品作家の作品五十六点を加えた計百三十八点を展示します。

**入場料**　一般七〇〇円　高大生四〇〇円
中学生以下無料（団体料金は各一〇〇円引）
※当館友の会会員は、会員証提示により団体料金

〈連絡先〉金沢市花里町一五―一二　末政哲夫
☎〇七六―二六三―六〇七五

## 第16回日本新工芸石川会展

**七月十八日(木)～二十二日(月)**
**(第7展示室)**

日本新工芸家連盟は、工芸の原点を見つめ、各作家が素材を生かし技術を駆使して、現代に望まれている生活と美との調和をテーマとして制作活動を続けています。石川会展も十六回を迎えることが出来ました。会員一同一層の努力を重ねております。より多くの方々にご高覧、ご批判を戴きたいと念願しております。

主な出品作家
北出不二雄　高光一生　利岡光仙　榎木荘平
組橋貞風　戸出克彦　大井幸子　向瀬孝之

**入場料**　一般六〇〇円　大学生以下三〇〇円
※当館友の会会員は、会員証提示により三〇〇円

〈連絡先〉金沢市宮野町ト七四　戸出克彦
☎〇七六―二五七―五九五一

## 第44回北陸創造展

**七月十八日(木)～二十二日(月)**
**(第8・9展示室)**

北陸創造美術会は、各作家がその主体性に基づくオリジナルな芸術を創造するために、もっとも自由で活動的な研鑽の場を作ることを目的としています。六月上旬、東京都美術館で行われた創造展に入選した作品を中心に、北陸支部会員百余名が、四部門（洋画・日本画・彫刻・陶芸）にわたって展示します。

より多くの方々に見ていただき、ご批評を賜りたいと念願しております。また、意欲的な同意者と支持者に対し、広く門戸を開きます。

**入場無料**

〈連絡先〉松任市専福寺町二二八―一五　加原和夫
☎〇七六―二七六―六三九五

## 菅原道真公一一〇〇年祭記念 北野天満宮神宝展

**七月二十七日(土)～八月十八日(日)**
**(第7・8・9展示室)**

本展では、菅原道真公（八四五～九〇三）の生涯とその没後の逸話を描いた国宝「北野天神縁起（承久本）」をはじめ、加賀藩主である五代綱紀・八代重熙・十三代斉泰がそれぞれ奉納した太刀（いずれも重文）、長谷川等伯筆「弁慶・昌俊図絵馬」（重文）など、北野天満宮の神宝約百三十件（国宝一件、重文十五件、重美二件）を紹介します。期間中には講演会（7、8ページ参照）も予定しております。

**入場料**　一般一一〇〇円　高・大生八〇〇円
小・中生六〇〇円　団体料金は各二〇〇円引
※当館友の会会員は、会員証提示により団体料金

〈連絡先〉金沢市香林坊二―七―一五
北陸中日新聞事業部
☎〇七六―二三三―四六四二

# 各地の展覧会　七月

※開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

**森 正洋 ― 陶磁器デザインの革新 ―**　8／4まで
東京国立近代美術館（東京都千代田区・〇三―三二四―二五六一）

**大英博物館所蔵フランス素描展 ― フォンテーヌブローからヴェルサイユへ**　7／9～9／1
国立西洋美術館（東京都台東区・〇三―三八二八―五一三一）

**ユトリロ展**　8／4まで
富山県立近代美術館（富山市・〇七六―四二一―七一一一）

**開山夢窓国師650年 大本山相国寺・金閣・銀閣秘宝展**　7／20～8／22
岐阜市歴史博物館（岐阜市・〇五八―二六五―〇〇一〇）

**長浜・大通寺の精華 ― 近世寺院と障屏画 ―**　7／16～8／13
滋賀県立近代美術館（大津市・〇七七―五四三―二一一一）

**江戸時代の絵画と文学**　7／14まで
奈良県立美術館（奈良市・〇七四二―二三―三九六八）

**美術の力 ― 時代を拓く7作家 ―**　7／13～8／25
兵庫県立美術館（神戸市中央区・〇七八―二六二―〇九〇一）

## ――（美術館の本）――

| | 税込定価（円） |
|---|---|
| 石川県立美術館所蔵品図録 | 三、五〇〇 |
| 前田育徳会展示室　開館記念名宝展 | 一、五〇〇 |
| 前田利為と尊經閣文庫 | 二、〇〇〇 |
| 工芸作品と図案 ―創造への思考― | 二、〇〇〇 |
| 前田利家没後400年 利家が生きた 桃山時代の美術 | 二、五〇〇 |
| 没後25年 写実と幻想の巨匠 宮本三郎 | 二、三〇〇 |
| 初公開 欧州随一の日本美術コレクション ランゲン夫妻の眼 ―石川県立美術館所蔵― | 二、〇〇〇 |
| 九谷名品図録（改訂版） | 二、〇〇〇 |
| 彫刻家 吉田三郎 | 二、〇〇〇 |
| 花の様式 ナンシー派展 | 二、二〇〇 |
| 花と緑の名品展 ―自然との対話― | 二、〇〇〇 |
| 日本芸術院会員 大樋長左衛門の世界 | 二、二〇〇 |
| **最新刊** | |
| 利家とまつ加賀百万石物語展 | 二、三〇〇 |

**※ミュージアムショップで販売中!!**
**郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。**
**（☎〇七六―二三一―七五八〇）**

## 企画展TOPIC

# 「利家とまつ　加賀百万石物語展」その三

前田利家は若い頃から、筋金入りの「かぶき者」でした。しかし「かぶき者」は改めて述べるまでもなく利家の専売特許ではなく、室町時代から江戸時代初期にかけての時代相を反映した振る舞いでした。「かぶく」とは傾くと書き、風流をもって派手、華美に化粧し一般常識から極端に逸脱した行動を誇示することを言います。

戦国時代「かぶき者」が横行した理由として、この時代を覆っていた無常観が挙げられます。一五一八年に成った室町時代の歌謡を集めた『閑吟集』には、「ただ何事もかごとも夢幻や。水のあわ。（中略）一期は夢よ。ただ狂人。」というくだりがあります。また、織田信長は幸若舞『敦盛』の「人間五十年下天の内をくらぶれば夢幻の如くなり。一度生を受け滅せぬもののあるべきか。」のくだりを愛誦したことや、豊臣秀吉の辞世の歌が「露と落ち露と消えにし我が身かな難波の事も夢のまた夢」だったことも想起されます。

長期にわたる戦乱や、下克上、背信などの非情さや無惨さを日常的に目の当たりにしていた当時において、盤石で永続的なものなどないことは自明の理であったことでしょう。このように、現世を夢幻と考える無常観から、生かされて在るこの現実を精一杯謳歌しよう、自分の振る舞いを他の人々の記憶に留め、存在したことの証としようという欲求が「かぶき」への原動力だったわけです。

前田利家は本能寺の変での織田信長の非業の死や、栄耀栄華を極めた豊臣秀吉が、幼少の嫡子秀頼の行く末に対する尋常ならぬ不安を抱いて世を去ったことなどに切実に関与していたことを考えると、無常への想いもひとしおだったといえるでしょう。その想いに比例して、自己の存在を証することの欲求も強烈だったことは、今回の展覧会の「呼び物」ともいえる利家が所用した重要文化財「金小札白糸素懸威胴丸具足」（前田育徳会所蔵）や「大鯰尾形兜」（尾山神社所蔵）の意匠、そして石川県指定文化財「前田利家画像」（中山家伝来）で見せている、神性と教養を暗喩するポーズや衣装のこだわりなどから容易にうかがい知ることができます。そして前田家が文化政策に力を入れてゆくのも、無常の世に少しでも種を植え、将来実を結ぶものをのこそうという姿勢によるものと考えることができます。今回の展覧会は、信長、秀吉関連の資料と合わせて、これらのことを再認識していただけるように構成されています。どうぞご期待ください。

（村瀬博春　学芸主査）

「利家とまつ　加賀百万石物語展～前田家と百万石文化～」
九月十四日（土）～十月二十七日（日）

## 貸出中の所蔵品

**七人猩々図**　狩野常信筆
**木彫加彩人形「つつ井筒」**　下口宗美作
計二点

展覧会　―親子で楽しむ美術鑑賞・前期―
子供の姿・家族の姿
会　期　六月一日（土）～七月十四日（日）
会　場　金沢市立中村記念美術館

## 次回の展覧会

**近代の美術**
**古九谷・再興九谷　後期**　（前田育徳会展示室）
**石川の彫刻　昭和20年代の作品から**　（第2展示室）
（第4展示室）
**七月二十六日（金）～九月十日（火）**

## 七月の行事案内

**《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》**

| 月日 | 行事 | 内容 | 会場 |
|---|---|---|---|
| 7／6（土） | 土曜講座 | 保存のはなし（宮　衛　学芸第二課長） | 講義室 |
| 7／7（日） | 講演会 | **作品とあゆみ**　**講師　西田洋一郎氏（画家）** | **ホール** |
| 7／14（日） | 月例映画会 | 幻視の画家ボッシュII　地獄への下降（23分）<br>彫漆　音丸耕堂のわざ（30分） | ホール |
| 7／21（日） | 月例映画会 | 幻視の画家ボッシュIII　千年王国への夢（23分）<br>有職織物　喜多川平朗のわざ（29分） | ホール |
| 7／27（土） | 土曜講座 | 仏像42　西の京のほとけ（2）（谷口　出　学芸専門員） | 講義室 |
| 7／28（日） | 講演会 | **北野天神信仰と加賀前田家**　※午前十時三十分より開催<br>**講師　味酒安則氏（太宰府天満宮文化研究所主管学芸員）** | **ホール** |

**※七月二十八日（日）の講演会に限り、午前十時三十分より開催されますので、ご了承下さい。**
**※今月の全館休館日は七月二十三日（火）～二十五日（木）です。**

## 所蔵品紹介 122

# 竹蒔絵浪に亀図二重切花入

**千利休**　大永2年（1522）～天正19年（1591）

**桃山　16世紀**

**口径10.7　高81.5（cm）**

竹花入は、竹のもつ素朴な美が愛好され、人工を加えない自然の美しさが、侘び茶の精神にかなうものとして珍重されました。また元来、青竹で一会限りの使い捨てとされたものでしょう。茶会記には天正十八年（一五九〇）七月九日に「竹ノ切カケ」（『天王寺屋会記』）が初見されて以来、「竹ノ筒」・「竹一重筒」等、竹の花入と確認できる表記が頻繁に登場するようになります。

この花入は、茶の湯の大成者である千利休の作といわれる竹二重切です。竹花入は天正十八年二月の、豊臣秀吉が北條氏征伐のための小田原出陣のおりに、利休が韮山の竹で作った尺八、一重切、二重切の花入が始まりといわれています。この花入は殊のほか丈の高い二重切で、上下の窓が大きく、堂々とした風格を示しています。また内側には黒漆が塗られ、浪と亀の蒔絵が施されていますが、これが利休考案のものとも、後に施されたものとも考えられます。箱蓋表に「利休造二重切筒／浪ニ亀之蒔絵／金森宗和指図ニテ正保之頃求之」の墨書があります。さらに宗和から加賀藩筆頭家老本多安房守に宛てた長文の添文があり、この花入が利休作のものとしては大変珍しいものであり、実際に花を入れて床に掛けた時の風情などが、細かに述べられています。この箱書や添文からすれば、正保の頃に宗和の扱いで本多家に入ったことがわかります。

竹の花入ほど、その茶人の雅趣を直截に表現するものはなく、江戸時代にはさらに多くのバリエーションを生み出していくのです。

## ミュージアムショップ通信

巷（ちまた）ではW杯サッカーの余韻、未だ覚めやらず。それとは無関係に今月のMS通信は窮屈至極。で、こんなネコの額のような場所でご紹介するものはというと…、も～これしかない、大河ドラマ「利家とまつ」関連グッズ！。キーホルダー、ストラップ、ブックマーカー、一筆箋、クリアファイル、オリジナルポストカード、果ては根付け、お香に至るまで、各種ズラリと取り揃えました。一足早い展覧会図録（後日紹介！）も加えて、商魂たくましく皆様のお越しをお待ちしています。おっと、これらは秋の展覧会が終わるまでの期間限定販売品なので、お・は・や・めに。

**「プリズムのきらめきから　西田洋一郎　絵画空間」関連行事**

**講　演　会〈聴講無料〉**

**演題**　作品とあゆみ

**講師**　西田洋一郎氏（画家）

**日時**　七月七日（日）午後一時三十分～

**会場**　当館ホール

**「北野天満宮神宝展」関連行事**

**講　演　会〈聴講無料〉**

**演題**　北野天神信仰と加賀前田家

**講師**　味酒（みさけ）安則氏（大宰府天満宮文化研究所主管学芸員）

**日時**　七月二十八日（日）午前十時三十分～

**会場**　当館ホール

**休館日**

**七月二十三日（火）～二十五日（木）**

**石川県立美術館だより**

第二二五号　平成十四年七月一日発行

〒九二〇―〇九六三　金沢市出羽町二番一号
TEL　〇七六（二三一）七五八〇
FAX　〇七六（二二四）九五五〇